

令和八年お盆法話

大河の一滴

正信寺 石川英和

令和八年七月十二日 正信寺 お盆 法話

大河の一滴

石川英和

【はじめに】

ご多忙のところ、本日もお盆法要にご参列いただきありがとうございます。ごさいま

す。
今回の法話のタイトルは、作家五木寛之さんのエッセイからいただいています。

私は五木寛之さんについて、解説とか評論ができるほどの読書をしていませんので、あまり偉そうなことを述べることはできませんが、いくつかの著作に触れ、思うところがありましたので、お話しさせていただこうと思います。

【五木寛之さんについて】

五木寛之さんは、昭和七年生まれで、私の両親と同年です。朝鮮半島の平城（ピョンヤン）で終戦を迎え、ソ連軍の進駐で混乱する中、母を亡くし、命からがら38度線を越えて開城（ケソン）に逃れたそうです。

開城と言えば、2002年から大韓民国が工業団地を作り南北融和の太陽政策を取った場所です。北朝鮮の労働者が働き、北朝鮮の大きな収入源でした。しかし、新型コロナが蔓延した2020年、稼働が落ちた工業団地を、北朝鮮の金正恩国務委員長が命令して、施設を爆破したというニュースの方が皆様の記憶に残っているかもしれません。

五木寛之さんは、開城に逃れた後、終戦を迎えてから2年経った昭和22年に帰国し、後に早稲田大学第一文学部露文科に入学したそうです。終戦時にソ連軍にひどい目に遭わせられても、露文科に入り、後年、『さらばモスクワ愚連隊』などソ連に関する小説などを発表しました。しかし、大学時代は貧しくて、売血やアルバイトをしてお金を稼いでいたこともエッセイに書かれています。最近の子供たちは、「売血」といつて、血を売ってお金を稼ぐことができたという事すら知らないのではないかと思います。そのような経緯で、早稲田大学は学費滞納で除籍になりました。作家になってから滞納していた学費を納入し、今では、中途退学になっているそうです。

戦後期には、ロシア文学の影響を受けたプロレタリア文学が流行りました。私は、高校生の時に小林多喜二の『蟹工船』を読んだのですが、とても暗いイメージで、プロレタリア文学は、なんてやるせなく、物悲しいのだろーろと思っていました。同時期に、五木寛之さんの『風に吹かれて』というエッセイを読み、さらに、数年たって就職したころに、『世界漂流』というエッセイを読みました。その時の印象は、フットワークの軽い人で、観察眼が鋭いという事でした。ロシア文学やプロレタリア文学の暗さはかけらも感じられませんでした。

後に、『親鸞』という著作を残し、『蓮如 われ深き淵より』という戯曲を書くことになるとは、高校生当時には、全く想像が付きませんでした。

五木寛之さんが浄土真宗を深く理解する発端となったのは、5歳下の弟を亡くし、心の痛手から執筆活動を休止して、龍谷大学の聴講生になったという経験が大きいようです。龍谷大学というのは、江戸末期の寛永十六年、西本願寺境内に学寮が設置されたことが起源になっています。ここで、五木寛之さんは浄土真宗の教えや歴史について学ぶことになっ

たようです。龍谷大学は、西本願寺が起源の大学ですが、大谷派、東本願寺派の僧侶も数多く卒業しています。

余談ですが、五木寛之さんというと、オールバックでロマンズグレイの長髪というイメージがあります。そのロングヘアを支えているのは「髪を洗うのは2ヶ月に1回」という独特の習慣があるそうです。なんでも、五木寛之さんがインドや東南アジア、モンゴルやチベット、ネパールを旅した時に、現地の人は殆ど髪を洗わないのに禿げている人がほとんどいなかった。」と『なるだけ医者に頼らず生きるために―私が実践している100の習慣』(中経出版刊)に記載されていて、無駄な手入れをしなくても髪は残せるのではないかと思つたそうです。髪を洗わないのも、あるがままの自然法爾の生き方の一部というのも極論のような気がします。

【私たちは大河の一滴】

最近、『大河の一滴 最終章』が刊行されたという報道を聞いて、昔読んだ、1998年出版の『大河の一滴』を読み返してみました。当時は、心に響いていなかった言葉が、この年になって、意味が良くわかってきたという気がしました。

大河の一滴という意味について、私なりにかいつまんでお話しします。空から雨が降り、小川となります。子供たちの心が澄んでいるように、上流の川は透明です。しかし、水が集まってくると、川は濁ってきます。濁るのが悪いのかというと、清流不魚住(せいりゆうにうおすまづ)というように、濁った水に生き物が育ち、その栄養分が豊かな水で田畑の作物が育ちます。そして、自らの意思のない水は、はからいもなく海へ海へと流れていきます。途中で蒸発する水もありますが、最後は大河と

なり海に注ぎます。そして、蒸発して雲となり雨となり、再び上流に降り注ぎます。

人間の生きざま、輪廻転生というのは、まさに、大河の一滴ということなのです。

『大河の一滴』が出版されるより前の1989年に発表され、美空ひばりさんの最後の曲になった『川の流れるように』の歌詞も、自らのほからいをこえ、川の流れる身を任せる「自然法爾(じねんほうに)」の心が根底にあるように感じます。

ただ、秋元康さんは、『川の流れるように』を作詞した当時、ニューヨークに住んでいたので、この曲は、ハドソン川を見て作詞したのではないとも言われています。それが本当だとすれば、日本のかつ仏教的な味わいが薄れてしまいそうで残念です。

【極楽浄土】

私は、常日頃、法話をする中で「極楽浄土」という言葉を使います。五木寛之さんの考えでは、極楽と浄土は別物で、極楽と地獄は現実世界にあり、浄土は天空遠いところにあると考えているようです。

少々長文ですが、引用します。親鸞聖人のことを親鸞と呼び捨てにするのは、原文のままです。

「浄土は極楽ではない。地獄とは人が生きている日々の世界そのもののことだろう。「地獄は一定(いちじょう)」という『歎異抄』の中に出てくる有名な言葉を、死んだらまちがいなく地獄へ落ちるこの身、という読み取り方を私はしたくない。(中略)

救いがたい愚かな自己。欲望と執着を断つことのできぬ自分。その怪

物のような妄執(もうしゅう)にさいなまれつつ生きる今の現在の日々。それを、地獄という。(中略)

しかし、宗教とは地獄にさす光である、と親鸞は考える。苦しむ魂を救うためにこそ信仰はあるのだ。それゆえに地獄に生きる者すべてはおのずから浄土に還る。日々の暮らしの中でも、一瞬、そのことが確かに信じられる瞬間がある。それが極楽である。(中略)

現実生きるということは、そのような地獄と極楽の二つの世界を絶えず往還(おうげん・ゆきき)しながら暮らすことだ。

そして、「浄土へ往生する」という意味は、生前どの様な人であったとしても、全ての人は大河の一滴として大きな海に還り、ふたたび蒸発して空に向かうという大きな生命の物語を信じることに他ならない。親鸞が最後に到達した「自然法爾(じねんほうに)」とは、そのような世界だと私は思う」

生きているだけで四苦八苦なのです。『歎異抄』の「地獄は一定」とは、死んだら地獄に落ちるとは五木寛之さんは考えていないようで、生きていく中で、煩惱と執着にまみれた生き様こそ地獄だというわけです。その地獄の中で、阿弥陀如来への信心、すなわち信仰によって一条の光が差すことが極楽なのだと述べています。

五木寛之さんの『大河の一滴』に記載されている「自然法爾」の世界感を感じると、他力によって生かされているという実感が湧いてくるように思います。

【正定聚不退転(しょうじようじゆふたいてん)】

浄土真宗では、正定聚不退転に至ることが最も重要な境地として教えられます。

正定聚というのは、正しく仏の悟りに至ることが定まった人々の集まりのことです。人の集まりを「聚(しゅう)」と言います。

不退転というのは、大乘の菩薩が菩提心を発してから仏道修行を積み、仏果を獲得するまでの階位の一つです。『菩薩瓔珞本業經(ぼさつようらくほんぎようきよう)』、『華嚴經』、『首楞嚴經(しゅりようこんきよう)』などで扱いが異なります。修行において、仏の悟りへ向かう歩みから後戻りしないということを意味します。自力の聖道門では、高度な修行を積んだ菩薩が初地つまり、不退転に至りますが、浄土真宗では、易行道の立場から、煩惱のある私たち凡夫が南無阿弥陀仏の願いを聞き、信心を頂くことで、この不退転の境地に立たせていただけたという意味になります。

親鸞聖人は、現生(げんしょう)、つまり娑婆世界であっても、阿弥陀如来の本願を信じることで、すなわち信心を得たその瞬間のことを信心決定(しんじんけつじよう)といって、正定聚の位に入ると説いています。これを現生正定聚と言います。

【現生正定聚の位に入ること】

現生正定聚の位に入ることとは、どういう事でしょうか。自分の生命が終ったとしても、輪廻から離れて浄土往生が定まるということです。つまり、後生の一大事という心配がなくなるわけです。

阿弥陀様の本願の第十八願によると、「設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆誹謗正法」とあります。これを現代語訳にすると、「私が仏になるとき、すべての人々が心から信じ喜び、私の国に生まれたいと願い、わずか十回でも私の名を称えて(念仏して)、もし生まれることができないようなら、私は決してさとりを開きません(仏になりません)。ただし、極めて重い罪である『五逆罪』を

犯し、『仏の教え（正法）を誹謗する者』だけは除かれます」となります。

『大無量寿経』には、法蔵菩薩の四十八願つまり本願が成就して、阿弥陀如来になったと記述されています。念仏すれば極楽浄土に阿弥陀如来がお救いくださるという第十八願も成就しているのです、それを信じて念仏をします。これは、信心を得て念仏していれば、命終の時に阿弥陀如来が仏国土にお救いくださるという意味です。

しかし、現生正定聚の位に入るということは、浄土に往生することが定まるので、命終によつて、地獄や修羅、畜生などの世界に輪廻転生することがないということになります。

現生正定聚の位に入ると、死ぬことすらどうでも良くなるのです。つまり、死ぬことが怖くなくなるわけです。

五木寛之さんの『大河の一滴 最終章』を読むと、冒頭から、五木寛之さんが癌に侵されていることが記載されています。

93歳になつても、毎日、新聞の夕刊に連載を持ち、週刊誌に連載を持つので、抗癌剤の投与で仕事が続けられないような治療はしたくないと医師に告げます。これは、生きたいという我執（がしゅう）なのかもしれないと私は思いました。

しかし、無用な医療は受けない、延命治療はしないという覚悟があり、自らの命に対しても他力に任せるような思いが綴られていました。

癌治療をする方が良いか、癌治療をせず自分の免疫や病気の進行を自然に任せた方が良いのかは、仏教的に、善し悪しを私は判断できません。

一つ言えることは、五木寛之さんが、死ぬことを恐れていないということです。

抗癌剤の副作用で執筆が続けられないことがないように、また、一日

でも長く執筆活動が続けられるように、放射線治療で癌の患部を照射することを選びます。

『大河の一滴 最終章』の本文では、放射線治療をすることは、無駄な医療行為はしないという自然法爾的な生き方の真逆を行くという意味の表現をされていましたが、私は、その治療方法を選んだことも、他力によるものだと思います。そして、一日でも長く、終戦当時に死線を越えた経験、弟さんを亡くされたときの宗教観を語ってほしいと思います。

【体と心】

NHKの「ラジオ深夜便」という番組の中に、「五木寛之のラジオ今夜一話」というコーナーがあります。

この放送の内容の一部が、『大河の一滴』に抄出されています。

その一文に、「かつて「体」と「心」は一致して人間をつくつていた」という章がありました。

ある夫婦がいました。夫は山師的にいろいろな商売に手を染めて借金を重ね、博打や女遊びをして家計を顧みませんでした。子供の養育費や両親の世話などは奥さんが働いて肩代わりしていたという状況でした。そんな中、奥さんが進行性の癌にかかり、余命三か月を宣告されます。夫は、自分の生き方を後悔し、奥さんの病状を心配するあまり、自分も癌にかかってしまいました。

夫は、自分の病状を知り、残りの人生で残される子供や奥様に罪滅ぼしをしなければならなかったようで、普通の人であれば、体を動かすのも大変で、入院してベッドに臥せり療養しなければならぬ病状の中、未回収の手形の決済に全国を走り回ったそうです。

夫は鬼気迫る勢いで、家族のために走り回っているうちにエコーに映る癌が小さくなっていき、その心意気を感じた妻も不調を訴えなくなっ

ていったという事です。そして二年の年月が立ち、夫婦とも癌細胞が小さくなり、癌と共存したまま延命していると、もう三十年近く前のラジオで放送されていたと言います。

西洋医学、科学万能の考え方では説明できないことは良くあることです。人間の「体」の自然治癒力には、「心」が大きく影響していると五木寛之さんは考えています。反対に、心が病んでいると、体の調子も悪くなるということです。命は、心と体が支えているということです。つまり、体と心のバランスを良くして、自然治癒力を高めていくことが、元気に生きるには、とても重要なのだと思います。

【健康ブーム】

認知症になりたくないとか、「ピンピンコロリ」で死ぬまで元気に過ごしたいと思う人が増えています。長寿があたりまえになり、命が尽きる前の時期に家族に迷惑をかけたくないという気持ちからそのように考えるのだと思います。

昨今の健康ブームは、四苦のうちの三つ、「老」や「病」や「死」についてのアンチテーゼ（対立概念）なのだと思います。そのブームの中で、健康食やサプリ、運動について微に入り細に入り説明された書籍が沢山発行されています。ところが、自然治癒力について述べられたものはあまり多くありません。

その中で和田秀樹先生は、医者でありながら、医者の言いなりにならない、現代医学をあまり当てにすぎることではないという著作を多数発表しています。しかし、実際に読んでみると、書いていることは理解できるのですが、本当にその通りで良いのか不安になります。それは、科

学は万能でないという意見に対して、科学的な証拠が欲しいという読者の自己矛盾があるのではないかと感じています。

結局、健康ブームで蛋白質を沢山とるとかビタミンをバランスよく摂取するといっても、万人に正しい処方があるわけではありません。それぞれの人の体質や病歴で、体調の整え方は変わります。それにもかかわらず、一般論としての正しい長寿の処方箋を求めているのではないかと思います。

私は医者から処方された薬に加えて、健康になる為にサプリを飲んだほうが良いとか、今よりもっとしっかり運動をした方が良いとか、やっていない事やできない事を追い求めると、結果的に心と体のバランスが悪くなって体調を崩してしまうのではないかと感じます。何のための健康なのか自問自答しています。

ここで、『歎異抄』の十三条で異安心（いあんじん）を嘆いていることも、健康法の参考になると思います。

たとえば、体に良い薬を飲んでいるから、どれだけ酒を飲んでも大丈夫夫というように考えることは、まさに、悪いことをしても浄土往生の妨げにならないという造悪無碍（ぞうあくむげ）と同じ行為です。さらに、和田先生がこう言っているから大丈夫と盲目的に信じてしまう事は、正しい仏法ではなく指導者個人を阿弥陀仏とみなして帰命してしまう、知識帰命（ちしききみよう）と同じなのではないでしょうか。こういったことにならないよう、注意していききたいものです。

今日生きていることに感謝して、結果として、はからいのない自然法爾の生き方を、適度に続けるのが良いのではないかと思います。この適度というのは、無理のないという意味で、心と体が受け入れられる医療

は受けつつ、同時に老いや病気、死を受け入れていくことだと思ひます。

【おわりに】

五木寛之さんは、先ほどお話しした通り、娑婆世界に地獄があり、そこに一筋の光を照らすのが極楽で、それは宗教の信仰が与えるものと言ひます。

その一筋の光を照射する信心に至るプロセスは、健康法のように一人違つてよいと私は思つています。最終的に心身ともに健康になれば、健康法は異なつても良いと考えています。

そして、信心に対するアプローチは、一日に蛋白質を何グラム摂取したほうが良いという方法論や科学的なものではなく、個人個人で異なる形で実践する生き方なのではないかと思ひます。

浄土真宗には、阿弥陀様の本願を信じて念仏をするという、根本的な考え方があります。ただ、仏壇に向かつて称える伝統的な方法だけではなく、皆様が日々生きていく中で、自然なやり方で心のこもつた念仏をして、阿弥陀様の他力を感じ、信心を深めても良いかも知れないと思ひます。

信心を獲得（ぎやくとく）するということは、はからいなく阿弥陀如来の本願を信じることで得られるもので、他人の信心と自分の信心は同じものです。しかし、そこに至る道のりは、人それぞれ異なつても良いと考えています。ただ、先ほどお話しした異安心になつていないか、自力の念仏になつていないかということは、私自身も氣を付けていきたいと思ひます。

個人的な経験で申し訳ありませんが、本日のように正信寺の本堂で法衣を着て読経をして念仏するのも良いのですが、山に登つてご来光を見るとき、良い体験をしたと感じます。太陽の光に阿弥陀様の光を重ね合わせ、他力を感じられる体験になり、味わいが深いと感じます。これこそ、五木寛之さんの言う娑婆世界の極楽だと思ひます。

本日もご清聴いただき、ありがとうございました。

